高く北へ向う 1羽を認めた。

フルマカモメ *Fulmarus glacialis*

尻屋崎から 1 km の海上で暗色型のもの 2羽を認めた。

ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris*

北緯 37°40' 以南で認めた。

オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas*

北緯 40°10' 以南。ただし、大部分は北緯 36°30' 以南で認めた。

コアホウドリ *Diomedea immutabilis*

26日の午前中、北緯35°45'と38°の間に合計40羽を数えた。また、27日に北緯 41° 地点で1羽を認めた。

クロアシアホウドリ *Diomedea nigripes*

26日に北緯36°付近で3羽、27日に41°付近で1羽を認めた。

ハシウトウミガラス *Uria lomvia*

27日に冬羽1羽と夏羽1羽を認めた。本種とウミガラスは近距離でないと区別ができないため見逃したものが若干あると思う。

ウミスズメ *Synthliboramphus antiquus*

北緯40°20'以南で認めた。

エトロフウミスズメ *Aethia cristatella*

27日に4つの群(125羽, 460羽, 550羽, 800羽)を観察した。これらの群がたがいに重複し合っているかどうかはよく判らなかつた。この日は風が強く風力 6~7 であった。黒田長久氏がこの種が荒天の際大群で見られることを報告されているのは興味深い(Vogel, No, 12, 1955年)。

コウミスズメ *Aethia pusilla*

北緯41°15'以北で認めた。

三重県におけるアマツバメ (*Apus pacificus*) のコロニー

橋 本 太 郎*

Summary

A breeding colony of the White-rumped Swift found in Mie Prefecture

Taro Hashimoto

* 三重県伊勢市朝熊町1547

A breeding colony of *Apus pacificus* was found in 1967 on a coasted coastal island, Mimianajima, southern Kii Peninsula, Honshu. It was in the dark crevice of the cliff about 10 m from the sea surface. A nest and its chicks were examined and are described briefly.

Fig. 1 The view of the corroundings of the nest.

Fig. 2 Incubating in its nest. the nest is situated about 700 cm from front of a slit in a rock.

三重県におけるアマツパメの観察は春秋の渡りに上空を飛翔する群が各地で見られ、決して珍らしいものではないが、蕃殖の調査は懸案のまま過ぎてきた。1962年8月8日、伊勢市内の新聞記者の一行に加わって紀伊半島三重県側の島勝^{シマカツ}ヘシイラ釣りを試みた帰路、島勝沖の海中にある岩山に多数のアマツパメが群飛しているのを観察、蕃殖の疑問をいだきながら再調査を期して帰った。

その後毎年6月を期して調査を計画したが支障が生じて行けなかった。1967年春、倉田篤君等が長島湾外の鈴島にマガモが蕃殖しているらしいという報告を得、6月4日雨中に舟を出し、際同行してアマツパメのようすを観察したが、この附近に点在する孤島にはいづれも小数ながらアマツパメが飛翔するのが認められた。よって蕃殖の疑いが濃厚になったので日を改め、

6月18日、長島高校の山本祐嗣先生をわずらわせて便船を得、先生と筆者と同校生物クラブ生3名の応援とも5名で長島湾外の耳穴島にいった。当日は半晴で少し風波があったが、無理に接岸して上陸し、かねて海上から見当をつけておいた附近の岩壁の割目を探索したところ、抱卵中の二巣を発見することができ蕃殖が確認された。

写真の巣は海面から凡そ10m程の岩壁の細い割目の奥にあり、大人の腕がやっと入る程度で前面から70cm程のうすぐらい奥にわずかな土の支えをつくり、その上に巢材を

Fig. 3 The nest and nestlings in close view.

まとめて作られている。前面からのぞいても抱卵中と思われる親鳥は平然として巣に伏せていて動かない。試みに木の枝で押してみても、わずかに体をずらせるだけであった。割目と平行にストロボをつかって撮影した。次いで巣内を調べるため、木の枝で巣を静かに入口に移動させると、親鳥はとびたずらに奥のほうにかくれてしまった。巣を岩上に移してみると孵化後

2〜3日の雛3羽と卵殻の一部があった（他の巣は手をふれず）。

ひなは全裸でうす赤く、目はとじていた。嘴の先に黒点があり、口角にふつらな黄色の附属物がない。残された卵殻は白色である。

巣は直径約10cm高さ約3cmの皿型で巣材はイネ科の枯れた莖葉を主としてタケの葉を混じ、中央を除く周囲と側面はセメダインでくっつけたように透明な唾液でかためられ泥土は殆んどつかわれていない。

以上の観察と記録写真をとり巣は元に戻しておいた。

この日耳穴島周辺には約150羽のアマツバメが群飛しており、そのうちの2羽を採集したが（農林省許可証昭42、第128号）、胃の内容は羽蟻を飽食しているところから特に羽蟻の発生に群れていたものと思われる。海上から島の一般を観察したところでは、同島には他に2ヶ所、時々親鳥が飛入するところがあったが、洞穴や崖になっていて、ロープをつかわないと調査できない。午後は波が荒らくなったので大島、鈴島、ダイヤ島をまわったが、大島に2〜3羽、ダイヤ島に2羽をみただけであった。

以上2回の調査の状況から、太平洋に面した断崖と洞穴の割目には多くのアマツバメが蕃殖しているものと推定される。然し割目の間という条件を考えると、あまり大きいコロニーは想像できない。又機会があれば再調査をしてみたい。